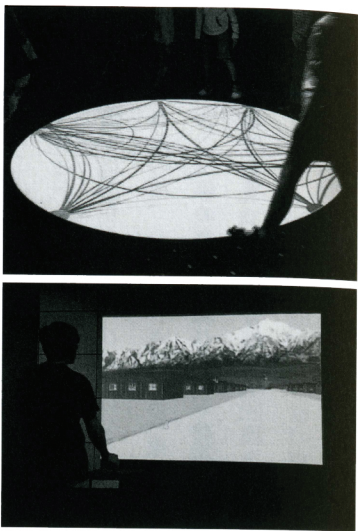


ウォルフガングがこのシステムとイメージを考案し、作曲家の古川聖が、このシャボン玉の音の部分を担当していた。いまウォルフガングはシンガポールにあるラサール芸術大学のメディア・アート学部長、古川は東京芸術大学先端芸術表現科の教授として活動している。

●カミュー作品はいつも詩情豊か

最初にカミュー・アッターバックの作品に出会ったのは、たしかシーグラフの会場だった。壁面には空から文字が詩のように連なって降ってくる。その前に立った観客の影も、文字が降ってくるなかに映し出される。観客が手をさしのべたり、首を曲げたりすると、詩の文字がその影の輪郭線に沿って流れていく……という、詩情を感じさせるインタラクティブ・アート作品だった。

IAMASのインタラククション01展のときには、「Arc Tangent(美の座標)」^{▶23}と「Liquid Time Series: Tokyo(液状の時間)」^{▶24}を出品してくれた。前者は、床に直径約三メートルの円形に投影された光像のまわりに観客が立つと、その足下を結ぶようにさまざまなパターンが現れてくる作品で、後者は彼女が東京に着いてすぐに、手持ちのビデオカメラで撮影した動画をもとに、観客の動きによってイメージが変化する作品に仕立て上げた早技には脱帽した。いまなお、つぎつぎに新しい作品を発表し続けている。



▶23 — [上]カミュー・アッターバック「Arc Tangent」。床に現れた円形の光の周りのどこかに観客が立つと、客の足下から別の人の足下までを結ぶような線やパターンが現れる。客が円弧に沿って移動すると、パターンもまたついてくる作品。インタラククション01で展示した。

▶24 — [下]タミコ・ティール「Beyond Manzanar」。第二次世界大戦が始まったとき、米国政府は日系アメリカ人を敵国人とみなし、全米11か所の収容所に送った。その一つ、カリフォルニア州の砂漠地帯マンザナーの収容所に送られた日系人たちは、無聊に耐えかねて特別に許可を得て収容所の裏庭に日本庭園を作った。IAMASの客員芸術家だったタミコ・ティールは、この史実に基づいて、収容所を訪れ、裏の日本庭園まで辿っていきけるインタラクティブな作品を完成。シーグラフでも紹介され、現在はサン・ノゼ美術館のパーマナント・コレクション。

●タミコ、民族や文化の境界から生まれる作品

タミコ・ティールは、日系米人の母親とドイツ系米人で建築史家の父親フィリップ・ティールのあいだに生まれた。スタンフォード大学でデザインを学び、七〇年代に話題になったコネクション・マシーンというコンピュータのデザインに参加したことも知られている。

彼女がIAMASの客員芸術家として滞在していた一九九二〇〇〇年に、イラン系アメリカ人のザラ・ウシマンドとのコラボレーション作品「Beyond Manzanar(マンザナーを超えて)」を完成した^{▶24}。